

## 「隣人愛」

2018年10月24日

ローマの信徒への手紙 13章8節～10節 互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があつても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

キリスト教は「愛の宗教」と言われている。それは、主イエスの生涯から、そのように評価されるからであろう。主イエスは、病む者、貧しい者、打ち萎れた者を求め、彼らにあなたがたは神に祝福されていると生きることを是認し、立ち上がらせた。福音書を読むと、主イエスの凄まじい愛の姿に圧倒される。

主イエスは、一人の律法学者の「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」という問いに下記のように答えている。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない(マルコ12:29~31)。」第一の掟「神への愛」は、人には見えない。しかし、神への愛を生きる者は、第二の掟「隣人を自分のように愛しなさい」を生きる者となる。隣人への愛は、隣人とは誰かなどという議論を起こすことではなく、日々身近で出会う打ち萎れた隣人を愛することである。その愛は、主イエスが、「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか(マタイ5:46)」とやっているように、見返りを期待しない無償の愛である。そのような愛を生きることができるといふ問いが起こる。主イエスは、その愛を生き抜き、神に逆らう罪人である私たちのために死んでくださったと聖書は告げている。私たちは、この主イエスの愛に生かされていることは確かなことである。

パウロは、人を愛する者が律法を全うすると言っている。ガラテヤ書でも、「律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです(ガラテヤ書5:14)」と書いている。一方、「わたしは、かつては律法とかかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、わたしは死にました。そして、命をもたらずはずの掟が、死に導くものであることが分かりました。罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまつたのです(ローマ書9:9~11)」と、律法によって殺されたとも書いている。この体験から「律法ではなく、信仰による義」を説いたのである。そして、愛について、「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです」と言う。誰でも愛することは少なく、愛されたことが多いと思う。事実そうであり、受けた大きな愛によって今まで生きてきたのである。愛し合うこと以外、借りがあつてはならないと言われると自分の愛の少なさにたじろぐ。しかし、キリストに結ばれて、新たに生まれた者は、愛することによって律法を全うするという道が備えられたのである。

「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」などの諸々の掟は、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約される。愛は隣人に悪を行わない。だから、主イエスの愛に倣う生き方、隣人愛を全うする新しい生き方が求められている。